

メランコリックな修史作家としての
ヨーハン・ゴットフリート・シュナーベル
—— 18世紀初期ドイツの作家へのアプローチ ——

ゲルト・シューベルト
石川栄作・石川晶子訳

稲元萌先生古稀記念ドイツ文学・語学論集

2003年4月1日発行

メランコリックな修史作家としての ヨーハン・ゴットフリート・シュナーベル —— 18世紀初期ドイツの作家へのアプローチ ——

ゲルト・シューベルト

石川栄作・石川晶子訳

1. シュトルベルク・アム・ハルツの年代記作家たち

『フェルゼンブルク島』や『恋の迷路をふらつき回る男』といった小説の作者として知られているヨーハン・ゴットフリート・シュナーベルは、またいくつかの他の作品を手がかりに修史家(Historiograph)としても十分に紹介され、研究されることもできるであろう。たとえば、プリンツ・オイゲンの伝記『これまでの時代で最も有名な軍司令官オイゲン・フランシスコ、プリンツ・フォン・サヴォイエン [中略] の生涯と功績と死去の物語』(シュトルベルク、1736年)がそれで、これは疑いもなく歴然とした修史家的作品である。この作品によってシュナーベルが同時代の他の修史作家と比較してどのように自己を主張しているかを研究することができるであろう。その際、比較を可能にするためには、まず最初に当時の歴史理解の分析から始め、それとともにこの修史家的著述業の歴史的状況について理解していなければならないであろう。しかし、その前にあらかじめ「歴史」(Historie)という概念をそのような計画のために概念史的に説明しておくことは、たやすいことではない¹⁾。その上さらに、18世紀初期には小説そのものもまだ歴史的ジャンルとして理解されていたということも加わる。事実、我々は、シュナーベル自身が『不思議な運命』第一部への序文の中でそう名づけている「ロビンソン風がらくた小説」(Robinsonaden-späne)もまた彼にとっては「歴史書」(Historien)であったということから出発することができるのである。しかし他方では、彼が特殊な修史家的仕事について極めて具体的な観念を持っていたということからも、我々は同様に出発することができる。以上をまとめて、彼においては歴史家の仕事と年代記作家の仕事とがまだ同一視されていると言ってもよいであろう。そしてそのような者としてシュナーベルはシュトルベルク新聞の編集者であるとともに、歴史的出

来事のための時事雑報の執筆者としても活動していたのである。最近になって再発見された、1732年のザルツブルク難民のシュトルベルク通過に関する彼の報告は、そのためのよい一例である²⁾。

ところで、シュナーベルにとっては当時——いわば手本の人物として——重要な年代記作家が目の前にいた。シュトルベルクの牧師補ヨーハン・アルノルト・ツァイトフクス（1671-1742年）で、豪華本『シュトルベルクの教会ならびに町史』（1717年）の著者である。エドゥアルト・ヤーコプスは「ドイツ伝記大全（ADB）」第45巻（1900年）のツァイトフクスに関する記述（11-13頁）の中で、年代記作家としての彼の傑出した業績を明確に次のように評価している。

宗教・教会分野における彼の著述上・実際上の活動はたいへん注目に値するとしても、A.D.B.に採録されてその名が永続的に残ることになったのはやはり年代記作家として「シュトルベルクの教会ならびに町史」を書いたからである。1716年刊と印刷されたものもあるが、主要な刊行はフランクフルトおよびライプツィヒ1717年版であり、10年後にはさらに「修正補遺」が加わった。この注目すべき業績を評価する際には、この著作が世に出たまさにその時代というものが考慮されなければならない。当時にあつて初めて、雑然とした非批判的な言い伝えや作り話から脱却することを方針とした、批判的で、古文書に依拠したドイツ史ならびに地方史の記述への試みが始まったのである。大ざっぱに見ただけでも分かることは、著者がシュトルベルク家の家族伝説と同家の始まりを6世紀やそれ以前にまで遡らせようと並々ならぬ努力を重ねているが、しかし彼には批判的感覚が乏しいということであり、彼はまったく重要視されていないリュクスナーの武芸教本までも考慮に入れているのである。しかしさらに詳しく見ると、著者が良心的な調査を行っていることが分かってくる。彼は古文書の登場によって確固とした歴史的地盤が踏みしめられる時代を、このような根拠づけを欠いた不確かな物語からは区別しているのである〔後略〕。

それではヨーハン・ゴットフリート・シュナーベルはツァイトフクスの素人仲間なのであろうか？おそらくは彼自身そのように考えたかも知れない。1737年に行われたシュトルベルク伯クリストフ・ルートヴィヒと、その従姉妹で隣国ロスラ出身のルイーゼ・シャルロッテとの結婚に際して、シュナーベルは自分の家の窓に「私の仕事はシュトルベルクで起こったことを全世界に伝えることである」という、自意識を示す言葉を飾り付けている。この祝いの出来事をシュナーベルは自らが宣言した職分にふさわしく、もう一つの時事文書に記録している³⁾。それゆえシュナーベルは史料テキストの作成者ということになるのか！？このことについてもいつかより詳しい研究がなされるであろう！

しかし、ここで私にとってまず第一に重要なのは、シュナーベルが自らを修史家的作家だと称している主張であり、このことが『不思議な運命』の第一部と第二部におけるさまざまな身の上話にどのように広く反映されているかということである。

2. 『不思議な運命』は「1710—1730年の全体像」か？

『不思議な運命』ないし『フェルゼンブルク島』の受容は、修史家的作家としてのシュナーベルの自己理解——このことについてはのちほどより詳しく触れることになるであろう——に極めて合致したものになっている。たとえば、アルノー・シュミットが『フェルゼンブルク島』を次のように推賞していることからそれは明らかである。

1710—1730年間の適切で魅力的な全体像を見たいと望む者は、読むのに今なおたいへん苦勞する綿密な「歴史書」ではなく、この極めて生彩に富んだ『フェルゼンブルク島』を手にするがよい。そこに読者は、おそらく目を見張るような驚きをもって、たとえば、「国民儀礼服」を着て「軍人王」に伺候する大男であるとはどういうことなのかを読み取ることであろう！⁴⁾

1960年にアルノー・シュミットはこのように評価することによって在来のシュナーベル受容に加わっている。問題となっているのは、シュナーベルの主著がなぜその時折の読者世代にとって依然として価値の高いものと考えられているのかを説明しようとする、これまで絶えず繰り返されてきた標準的評価である。

まさにこれらの物語〔『フェルゼンブルク島』における身の上話——G.シュナーベル注〕においては17世紀ならびに18世紀、主として17世紀末ならびに18世紀初めの社会生活が極めて魅力的な正確さでもって反映されている。

このようにカール・ローゼンクランツは『フェルゼンブルク島』1828年の新版に関する書評で述べているのである⁵⁾が、1893年にはドレスデン大学文学教授アードルフ・シュテルンが次のように書いている。

『フェルゼンブルク島』のような本の創造と享受の中にある極めて独自の密かな魅力を理解するためには、18世紀前半の社会状況、つまり30年戦争以降市民層の中に今なお存在していた息苦しい圧迫、堅苦しく粗野な慣習、貧困と無気

力といったことを思い起こさなければならない。著者は織り込んだ諸短編を通して、すなわち、学生や言語教師たち、かつての兵士たち、実にさまざまな同業組合の職人たちの身の上話を通して、市民的世界全体が我々の眼前にくっきりと現れるように配慮したのであり、その市民的世界とは内面的な不自由と外面的な偶像崇拜、悪習と素朴でありながらひどく偏狭な利己主義が存在する一方では、飾り気のない内面的な敬虔、他人の悩みや悲慘に対していちはやく呼び起こされる同情、電害が起こるたびに自分の小さな畑を耕すことを繰り返して収穫を上げようと努める、挫けることを知らない雄々しい労働力を有する世界である。ここにあるのは輝かしい追憶を呼び起こすウェストファリア条約と皇帝レオポルト1世ならびにカール6世のドイツであり、このドイツには外国の華美と自国の粗野、形式づくめの硬直性と野蛮な奔放さが見事に混ざり合った社会があり、みすばらしい、尊敬すべき、つらい仕事でなんとか生き抜いている市民たちに混じって、自堕落な学生、戦争好きな者たちや冒険家たち、錬金術師や詐欺師たちがいるかと思えば、敬虔な悪漢や邪悪な人殺しがいるのである。著者が自分の個々の物語を書いていく上でいかに多くのものを他の作者から借りてきているにしても、彼はこれらすべての生活に深く精通しており、それらをよく見て観察してきたことは明らかである。⁶⁾

これに相応するようにヘルマン・ウルリヒは『フェルゼンブルク島』第一部の新版(1902年)への序文の中で次のように述べている。

すでに幾度か事についでに挙げておいた挿入物語にも特別に言及して評価を下す必要がある。それらは全部で20編にも及ぶが、その大部分は第二巻に含まれている。これらの身の上話を読むと、読者にはドイツ民族の極めて広い層の生活、特に中間層ならびに下層の人々の生活への深い洞察が今や開けてくるのである。[中略]要するに、これらの身の上話の中だけでもドイツ民族の習俗史に寄与する宝の山があるのであり、それらを民衆的物語芸術の逸品と評しても過言ではないであろう。⁷⁾

最後に、ハンス・マイヤーは1953年に発表し、その後幾度か彼自身が活用しているシュナーベルに関する論文の中で、ウルリヒの評価に賛同し、さらに次のように述べている。

それら[フェルゼンブルク島における身の上話——G.シューベルト注]はその本質的な部分において18世紀初期ドイツの典型的な経歴書であると見なしてもよいであろう。⁸⁾

評価はすべて一致している。つまり、『フェルゼンブルク島』には一つの重要な歴史的ないしは修史的潜在能力、研究のための宝庫が秘められているのであ

る。というのも、社会史にとっては歴史を物語から再構成することは、すでに以前から何ら異常な仕事ではなくなっているからである。

しかしながら、ここで述べた『フェルゼンブルク島』におけるそれらの身の上話において問題となってくるのは、これらのテキストが実際にどのように評価されるべきであるか、ということである。シュナーベルは我々に可能な限り実際にまったく本当の話を、ないしは彼自身の言葉によれば「まったく本当の話を含んでいる」ものを提供しているのか？それとも彼はそれらすべてを単に考え出しただけなのか？肝心なのは文学、おそらくは何らかの文学に由来する短編小説ということなのか？これらの問いには、周知の通り、これらの身の上話のどれか一つの由来を証明できる史料によっても、また直接的な文学的論争を証明できる文学上の原典によっても、これまで未だ一度も具体的な答えが与えられることはできなかった。それでも私の見るところ一般的に、当時のどのような文献資料が『フェルゼンブルク島』における身の上話と対比可能であるかということについては何か言えるのではないかと思う。つまり、その文献資料とはシュナーベルが直接資料として利用したのではなくとも、原典として彼の仕事にとって意味のあったテキストのことである。これについては可能な限りさらに内容に関する具体的な調査が行われるべきであるが、その際に問題となるこれらのテキストはかなり広範囲なものとなるのは当然のことである。

3. 追悼説教と冒険旅行記

『不思議な運命』においてフェルゼンブルク島で語られる身の上話は、一般的に人生告白として、さらに小説のそれぞれの主役たちの一種の浄化儀礼として解釈されてきた。それらは、この島で身の上話をする者がそれによって自分のこれまでの悲惨な生活あるいは行状と訣別し、浄化されてフェルゼンブルク島の誠実な人々の仲間入りをし、つまり取り戻された地上の楽園に受け入れられるという機能を持っている。これと同様の機能を持っているものとして追悼説教における故人の伝記があるが、これはシュナーベルの時代にはまだ印刷された形で行われていた。ルターに遡るこの追悼説教は、特に17世紀以来、死者が神の慈愛によって天上の楽園に移り住むという希望を抱いて、今や神および教会との仲を築き上げるに至るまでの、地上の苦しみや谷間における故人のつらい、悩み多い人生の詳細な伝記を含んでいる。この信仰促進の文書は、周知の通り、シュトルベルク宮廷の特別の愛顧を受けることになり、その伯爵夫人ゾフィー・エレオノーレ（1669-1745年）の注目すべき情熱によって収集さ

れたのである。印刷されたおよそ4万編の追悼説教を彼女は集め、その大部分は今日ヴォルフエンビュッテルのアウグスト公図書館の管理下にある。シュナーベルがこの伯爵夫人の情熱に無関心であったとは思えない。もっとも彼がこの無尽蔵の史料に触れて、そこから何らかの刺激を受けたかどうかは分からない。そうではないにしても、彼がここで自分の小説中の身の上話の資料編集といったことへの刺激を受け、特にこの種の信仰促進的伝記の機能からもヒントを得たことは、推測されるところである。もちろん実際に行われたすべての追悼説教が印刷されたわけではない。シュナーベルの時代にはそれらを印刷することはすでに流行遅れになっていた。それゆえにそれらはおそらく結局は一つの世俗的な収集の対象物になりえたのであろう。しかし、印刷されることのなかった追悼説教もまた「中身があって重要」であり、たとえば、シュトルベルク町教会の文書館で束にして保管されているような追悼説教がそれである。その文書の束は大部分シュナーベルの時代のもので、最近になってようやくその目録が作られ、それによって研究がしやすくなったのである。⁹⁾シュナーベルは1724年にシュトルベルクの市民となった。1727年2月1日にシュトルベルクでは、1668年ゴルスレーベン／ウンシュトルート生れのシュトルベルク伯爵家侍医で「有名な開業医」、いわば理髪師シュナーベルの仕事上での教養ある同僚、ヨーギーアス・ホフマン博士が他界している。このヨーギーアス・ホフマンのための印刷されていない追悼説教は、上記目録に番号282として記載され、そこに含まれている伝記が次のように要約されて再現されている。

彼は生涯の最初の16年間は病気がちで、虚弱体質であったが、とても知的であったことが分かっている。父親は彼とその兄弟姉妹たちのために家庭教師を雇った。1682年3月、彼はライプツィヒのトーマス学校に入学したが、病気のため1年後には家に連れ戻されねばならなかった。病氣回復後、彼はクヴェートリンブルクのギムナジウムに移り、そこで彼は特にザムエル・シュミート学士のもとで古典語の教養を積んだ。1688年、彼はライプツィヒ大学に入学した。そこで彼は4年間学び、その後開業医として旅行に出かけた。そのとき彼が訪れたのは、フランクフルト・アム・マイン、ニュルンベルク、アウグスブルク、ウルム、ミュンヘン、シュトラースブルク、ティロルそしてスイスである。そのあと彼はイタリア全土を旅行したが、その際滞在したのは特にパルマ、モデナ、マントヴァ、ヴェニス、パドヴァ、ジェノヴァ、ミランドラ、フィレンツェ、リヴォルノ、ローマそしてナポリであった。追悼説教はこれらの旅の期間中に起こったさまざまな危険に晒された出来事について報告している。たとえば、博士はリヴォルノ近くで馬もろとも谷に落ちたり、またあるときは海賊に捕らえられたりしている。3年にわたる旅行のあと彼は家に帰り、従兄弟で

ある医学修士クリストフ・オレアリウスの助手としてヴォルフエンビュッテルへ赴いた。そこではクリストフ・ルートヴィヒ・フォン・シュトルベルク伯がこの若い医師に注目し、18世紀の初め、彼にシュトルベルク伯宮廷医の地位を提供した。彼は新しい、すこぶる効き目のある薬を開発した。¹⁰⁾

「新しい、すこぶる効き目のある薬」ということからして、このシュトルベルクのホフマンはあのいわゆるホフマン滴剤の発明者ではないことが分かる。その発明者とはハレで教鞭を執っている医師にして、化学者のフリードリヒ・ホフマン(1660-1742年)であった。この両医師ホフマンが親戚であったかどうかについては、私には何も分からない。

ともかくシュトルベルクのホフマンは、シュトルベルクに自分の島を見出し、シュナーベルがその人生歴を知ることができる前に、フェルゼンブルク島民であるにふさわしい不思議な運命——海賊の捕虜となったことを含めて——の持ち主であった。シュナーベルが実際にこのシュトルベルクの宮廷医と密接な接触があったかどうかは、残念ながら分からないが、約2年間はその可能性があったであろう。その上さらにホフマンはシュナーベルにとって「愛の迷路をふらつき回る男」のイタリア旅行のための有効な証人としても利用できたであろう。

シュナーベルが我々に呈示しているような、多少ともセンセーショナルな市民的運命を書くための資料を含んでいるのは、なにも追悼説教集ばかりではない。まさにこの時代には印刷された市民自らの手による夥しい体験記が存在する。それは、船の難破、海賊の襲撃そして奴隷生活を含めて、特に航海を乗り切ったことに関するもので、シュナーベルの『フェルゼンブルク島』における身の上話に匹敵しうるような体験記である。ダニエル・デフォーにとってもあの画期的な小説のためにそのような体験者自身の語った報告が利用できたわけである。つまり、スコットランドの船員アレキサンダー・セルカーク(1676-1721年)によるジュアン・フェルナンデス島における「ロビンソン」生活についての報告がそれである。¹¹⁾ 残念ながらセルカークのそのまま印刷された報告は残っていないが、しかし、特にドイツ語圏内では、オイティーン州立図書館で収集され、文献目録が作られ、研究もなされ、ときには新たに刊行されることもある相当量の印刷された小型冒険旅行記が存在している。

参照例としてここでは1635年から1779年までの期間から3つの例を挙げることにしよう。そのうち最も早い時期のテキストはドレスデン市民ニコラウス・シュミットによって1635年に、つまり本来のロビンゾナーデン期よりもずっと

前に印刷されたものである。その90頁の小冊子のバロック風題目は次の通りである。

ドレスデン市民にして毛皮加工職人ニコラウス・シュミットがコンスタンチノーブルにおいて、さらにその後エジプトその他の土地へ奴隷となって余儀なくされた水路および陸路の旅の途上において、哀れにも鎖や紐に繋がれてトルコ人たちの中で耐え忍んで過ごした5年にわたる過酷な捕虜生活の簡潔にして真実の記録。ここには多くの新しい重要な、そして他の類似の旅行記には見られない話が、一部は挿絵による説明付で、自らの経験に基づいて紹介される。若干のトルコ語一覧表付。印刷、ドレスデン。ヴォルフ・ザイフェルト書店刊、1635年。

この題目は、当時すでに「類似の旅行記」が存在していたことばかりではなく、これらの本から資料がおそらく集められたであろうことをも明らかにしている。このような旅行記が特にその真偽をめぐってより詳細な研究の対象となるのは、とりわけそれらが特別の地方史的関心を持つものである場合である。たとえば、18世紀半ばのアムルム島出身のハルク・オルーフの旅行記の場合がそれである。

ユトランドのリペン司教区アムロン島生まれのハルク・オルーフの身に、コンスタンティーネならびにアフリカの他の土地で起こった特別の冒険。その奇妙さゆえにデンマーク語で印刷されたが、このたびドイツ語に翻訳されることとなった。フレンスブルク、ヨーハン・クリストフ・コルテンス出版社、1751年。¹²⁾

極めて注目に値する業績となったのが、次に掲げる1779年刊の22頁から成る小記録である。

ハンガリー人アンドレアス・ジェルキー氏の物語。彼は予期せぬ多くの不運な出来事、船の難破、奴隷生活、野蛮人たちの中での危険に晒された生活を耐え抜いたのち、ついにはバタヴィアで名誉ある立派な地位に就いた。ウィーン、ヨーハン・ゲオルク・ヴァインガルト書店、1779年。

およそ100年後——ハンガリー語では1872年、ドイツ語では1875年——にルートヴィヒ・ヘヴェシはこの小さな本から豪華な——300頁を超える長さの——青少年小説を作り上げた。「ハンガリーのロビンソン」として今日までハンガリーでは人気があり、多くの版を重ねてきたもので、『仕立職人アン Dre

アス・ジェルキーの四大陸における冒険。史料に基づいて初めて詳細に書かれた、より成熟した青少年のための読み物』という作品である。この本の文学的名声の結果として、1930年代以降、正しくはアンドラス・ジェルスキーという人物——1738年4月20日に南ハンガリーのバヤに生まれ、1783年12月6日ブダに没した——についての集中的な研究が始まったのであり、ともかくこの研究によってジェルキーの冒険に富んだ、そして確かに虚構のロビンソン風がらくた小説も含んでいる人生記録のいくつかの重要なデータが、他の資料や文書を手がかりにして確認できたのである。¹³⁾

しかし今や注目すべきことは、すでにシュナーベルが『不思議な運命』第一部と第二部において当時のこれら冒険的人生記録のためにいわば文学的記念碑を建立したということである。

4. シュナーベル作品への修史家的接近法

確かにこれら18世紀の冒険旅行記は、シュナーベルの『不思議な運命』における身の上話と同様、無批判的に歴史的資料として用いられるべきではない。それにもかかわらず、シュナーベルの文学作品、とりわけ彼の主著を歴史研究のための資料としても使える可能性はある。しかも単に文学史の上でドイツ初期啓蒙主義の重要な証拠としてだけでなく、いわば歴史研究のメタレベルでの利用の可能性である。1977年にシュナーベル作品に関する初めての包括的研究を『読みながら市民は自分の世界を意識する』という独特の題名のもとに発表したローラント・ハースは、シュナーベルの主著の歴史的意義を的確に、「シュナーベルの『不思議な運命』は市民的意識の所産であり、また市民的意識へと導くものである」¹⁴⁾と明言している。というのも、歴史的に見て、ドイツではこの書において、またこの書によって初めて市民的自己意識がその形をとって現れるからである。歴史家ディルク・ファン・ラークはこの手がかりを取り上げて、最初の構想の中でシュナーベルの『フェルゼンブルク島』を「小市民的メンタリティーの泉」として参照し始めている。¹⁵⁾

シュナーベルの『フェルゼンブルク島』へのもう一つ注目すべき——いわば修史家的な——接近法を、日本の文学研究者でゲルマニストである稲元萌がこれまでの12年間に一連の論文において試みてきた。彼はシュナーベルの小説を「歴史記述」(Geschichts-Beschreibung)というシュナーベルの要求通りにまともに受け止めて、フェルゼンブルク島の個々の時代、発展と変化を伴う入植史を歴史的かつ系統的に辿っている。まず彼は島の前史、つまりドン・シリー

リヨ・デ・バラロから始める (1991年)。¹⁶⁾ 続いて移住史の叙述と1725年の島の特殊状況 (1991年)。¹⁷⁾ 1726-1728年のフェルゼンブルク島における変化を彼は「地上の樂園の改良？」(1995年)という題で問題にする。¹⁸⁾ フェルゼンブルク島における次の節目は1730年であるが、これを彼は「共和国の夢」(1996年)という表題のもとに分析する。¹⁹⁾ そして最後は「地上の樂園にも戦争と天災地変は迫る——フェルゼンブルク島 1734-1740」(1999年)である。²⁰⁾ このように辿られたフェルゼンブルク島の虚構の歴史記述に、稲元は続けて同じ時代の日本の実際の歴史を対置させ、ここから彼の結論を、特に徳川幕府下の日本の鎖国政策 (1638-1868年) についての日本における議論を顧慮しながら、引き出している。

5. 修史家

さて、いよいよ修史家的作家としてのシュナーベルの自己理解を考察することにしよう。彼はこの点をさまざまな箇所でもどのように表現しているのか。そしてすでに見てきたように、いささかでもこの点で注目されてきていることは何なのか。

このことに関連してまず注目すべきは、その時代にはすべて「修史家」(Historiographus) という雅号のもとに世に出た種類も質も異なるさまざまな作品がヨーハン・ゴットフリート・シュナーベルによって書かれたとされていることである。このきっかけを作ったのがヘルマン・ウルリヒであり、彼は1898年にそのロビンゾナーデン文献目録において『フィンランド女ザロメ』をシュナーベルのものだとしたのである。このことに関してウルリヒは、1902年に新たに編纂した『フェルゼンブルク島』第一部への序文の中で次のような理由づけを記している。

私自身は自分の文献目録²¹⁾ において (のちにクレーマンも手紙で賛成してくれたことであるが)、文体が同じであること、題名女性のザロメという珍しい名前と『フェルゼンブルク島』第一巻で用いられている名前とが一致しているということに基づいて [中略] さらに最終的には両方で使われていて、その他では見出されないラテン語の引用句 Haud curat Hippoclidēs (ヒポクリデスは注意が足りない) があるということで、次の小説がシュナーベルのものであると認定したのである。²²⁾

『並外れて美しく、教養あるフィンランド女ザロメ。彼女はドイツ人の両親から生まれたが、幼くして両親とともにフィンランドへ連れて行かれ、フィンランド国籍となった。彼女のこの伝記には、彼女の誘拐や船の難破の事とともに、さまざまな交霊術的、魔術的、かつまた風変わりな情事が書かれている。彼女を誘拐した者は野たれ死にしなければならなかったが、彼女の方は幸いにもまずオランダ、次にザクセンの祖父母のもとに、そして最後にはフィンランドの実の両親のもとに帰り着き、のちに Hx 伯を夫に迎えた。これは確かな情報に基づいて好奇心旺盛な読者の楽しみのために一人の修史家 (HISTORIOGRAPHVS) が書き上げたものである。フランクフルトおよびライプツィヒ。1748年』

とりわけ同じ雅号のために——しかしそのためばかりではないが——私はさらに二つの作品を指摘したのである²⁹⁾が、それらはおそらく同様にシュナーベルが書いたものと考えてもよいであろう。まず最初は次の小説である。

『前世紀の初め頃、ボヘミアの森で、しかも熊の穴で偶然見つけられた天才少年に関する風変わりな報告。この少年には洗礼の際にイグナティウス・アウグスティヌス・ザムソンという名前がつけられた。彼はのちに品行方正で、思慮分別のある人間として、また有能な騎士になるよう教育されたので、その優れた品行と並外れた体力のおかげでついには王侯貴族の身分にまでなった。今日存命のさまざまな武勲ある英雄たちも、また身分の高い彼の子孫たちも、確かな記録や付属資料に基づいて彼を自分たちの始祖と認めることに、最大の光栄と喜びを見出した。古い真正な写本に基づいてこれを読者に心をこめてお伝えするのは、一人の誠実な修史家 (HistorIoGraphuS) である。エアフルト。ヨーハン・ダーフィット・ユングニコル印刷。1747年』

この作品の作者がシュナーベルである可能性の示唆を、私はすでに前ベルリン王立図書館、現ベルリン国立図書館の古手稿本アルファベット順目録から得ていた。そこには第2版 (エアフルト1748年) の一冊がまだ存在している。この推測を裏付けるのは、雅号「修史家」(HistorIoGraphuS)の活版印刷の仕方に見られる強調された大文字 I/G/S である。この指摘はベルリンの法律顧問エーリヒ・セロ博士——『刑事司法の錯誤とその原因』(ベルリン1911年)の著者で、カール・マイの弁護士——にまで遡る。それは「法律顧問エーリヒ・セロの遺産中の書籍目録、ベルリン」を記載している1915年のベルリン美術品競売所ルドルフ・レプケの競売目録1738号に由来する。セロは幸運にもかなり多くの古いシュナーベル作品諸版の所有者であった。つまり、彼は『不思議な運命』全四巻の1761-72年刊行版、『愛の迷路をふらつき回る男』の1763年版、『フィン

ランド女ザロメ』の1751年版を所有していたのである。従って、彼には比較検討する手立てが十分にあって、彼が入手した『天才少年』初版をシュナーベル著と判断することができたのである。私は別稿でこの小説が内容、文体、テーマの点で完全にシュナーベルの作品に合致するということを略述したことがある。²⁴⁾

『ドイツ語による著作物総覧——1700-1910年』にはさらにもう一つの「風変わりな報告」が記載されている。今度は「天才少女ベアトリクス」に関する報告で、発行地は同じで、刊行年は1748年となっている。²⁵⁾ この小説には私よりも早くすでにディートリヒ・グローネルトが注目しており、彼の教授資格請求論文の文献目録の中で著者をシュナーベルであるとしている。²⁶⁾ 彼の場合も同様に図書館の蔵書目録からの発見によるものであった。グローネルトはベルリン・フンボルト大学の図書館で、小説『天才少女ベアトリクス』が『フィンランド女ザロメ』と一緒に括られていて、目録ではシュナーベルの名のもとに記載されているのを発見したのである。内容を少し比較しただけでも、シュナーベルを著者と見なすグローネルトには正当性があるように思われる。しかし、何よりもまずここで再び著者として「誠実な修史家」(ein ehrlicher Historiographus)と記されており、しかも『天才少年』の場合と同じ強調された大文字が使われているのである。この小説の完全な題名は次の通りである。

『今世紀の初めにマイン川地方で奇跡的に捨て子として釣り上げられた天才少女に関する風変わりな報告。この子は聖なる洗礼においてベアトリクスと命名された。ここで語られるのは、この天才少女の極めて驚嘆に値する運命ばかりではなく、この少女がいくらか成長したのちに、奇妙にも火と水の中で実に多くの奇跡を行って見せて、すべての人々を驚かせたことである。しかし最も驚嘆に値することは、この天才少女が数年後にある高貴な王子と結婚し、今もなお王子とともに国を支配する王妃として満ち足りた生活をしていることである。これらすべては読者のために確かな情報に基づいて、そして格別に好奇心旺盛な読者のために一人の誠実な修史家 (ein ehrlicher Historiographus) が書き上げたものである。(飾り帯) エアフルト、ヨーハン・ダーフィット・ユングニコル印刷ならびに出版、1748年』

確かにこれらの作品に関してここで挙げてきた間接証拠は、最終的にシュナーベルが実際の著者であることを証明する力を持っているわけではない。それらを含め、さらには多くの憶測上の表題を持った作品を含めて、約20年間の期間に刊行された相当量のテキストがただ一人の著者によって書かれたということはありえないという異論が出てきてもおかしくはないであろう。他方で重

要なことは、これらのテキストが本質的には二番手、三番手の書き手を経て書き集められた資料であるということである。そしてシュナーベルが異常なほど筆まめであったことは、彼によって書かれ刊行されたことが確かである諸作品によっても、また1731年から1738年まで、あるいは明らかにもっとのちまで新聞製作に携わっていたことによっても証明される。とにかく極めて注目に値することは、我々がここでその当時の著者——この明白な解釈が正しい限り、シュナーベルの頭文字と一致する頭文字を、自らが選んだ雅号「修史家」(Historiographus)に絡ませて、それによって自らの著作家としての特性をいかに認識しているかを明らかにしている——と関わり合っているということである。そしてまさにこの主張を我々はシュナーベルの作品の中に見出すのである。

ここで再びシュナーベルに戻って、『珍しい軍人小説』を刊行するという彼の予告に移ることにしよう。すなわち、この企画の最初の予告は『不思議な運命』第一部の1730年12月2日付の序文に見出される。

その通り、私は他人に自分の袖を引きちぎられてしまうよりは、むしろ自らに催促して、来たるべき夏には一つの珍しい軍人小説を仕上げることにしよう。この小説のためにはいろいろな実直な軍人たちがすでに素材を送ってくれているが、それを今後も続けると約束してくれている。もしかしたら現在の作品よりもこちらの作品の方にもっと楽しみを見出す人が多いかも知れない。

この予告によれば明らかに一つの作品がすでになんかの程度に出来上がっているはずであるが、しかし、この企画はさしあたり実現されていない。このことは、この小説が別のいくつかの企画とともに改めて予告される1735年12月2日付の『不思議な運命』第三部の序文から読み取られる。

ところで、私は1730年以降に刊行された自分の本が、印刷された歴史物を愛読する多くの読者によって楽しく読まれてきたことをかなり確信しているので、来るべき聖ミカエル祭の見本市へ向けて、第一部の序文で約束した軍人小説——といっても、まったく本当の話を含んでいるのだが——を世に出すだけでなく、すでにいつでも出せるようになっている別の珍しい旅行記やさまざまな身分の人たちの伝記を公表することを怠らないつもりである。

これらの予告とともにここではもちろん自分の作品に対する作者の自己評価も注目に値する。というのも、彼はここで自ら『フェルゼンブルク島』を「印刷された歴史物」に数え入れ、そのあとで「しかしまったく本当の話を含んで

いる」という「小説」を約束しているからである。ところが、1736年の春、予告した企画の達成間近になってシュナーベルには再びそれを引き止める出来事が起こる。すなわち、1736年4月21日のプリンツ・オイゲンの死去である。これをきっかけにシュナーベルは1ヶ月も経たないうちに——その序文にはシュトルベルク、1736年5月25日と記載されている——『これまでの時代で最も有名な軍司令官オイゲン・フランシスコの生涯と功績と死去の物語』と題する、ともかく172頁の本を市場に出している。クレーマンはこの業績について、シュナーベルが編集した新聞の研究を手がかりにして次のように証明している。

シュナーベルは驚くべきほどの速さで執筆した。1736年第19号、5月7日月曜日付の新聞で、彼は読者にプリンツ・オイゲン死去の第一報を伝えている。同年第25号、6月18日月曜日付では、すでに彼のオイゲン伝が刊行されたことを広告している。²⁷⁾

この種類の執筆活動はまったく明らかに修史家の仕事であり、彼にとっては特殊な事例ではないということは、彼の新聞における他の死亡記事に続いてシュナーベルがそれ相応の予告をしていることから明らかである。彼は自らの新聞「シュトルベルク集報」1736年第37号の短信においてもこのことを一般に明確に予告している。

ジグラー未亡人（この女性にはプリンツ・オイゲン伝がマクデブルクで刊行されるとすぐにその復刻版を作ったためにシュナーベルの怒りを買った——G.シューベルト注）にはそのうち、ギザンダーが近々もっと多くの要約した歴史記述を世に出すということが知られることであろう。²⁸⁾

そのような「要約した歴史記述」の24頁から成る一例を、私はすでに作品の作者確定の問題を扱った論稿²⁹⁾で次のように指摘した。

極めて貴き、最強にして無敵の前君主、選ばれしローマ皇帝、常に領土を拡張する人、ゲルマニアとヒスパニア、またハンガリー、ボヘミア、ダルマチア、クロアチア、スクラヴォニアの王、オーストリア大公等々であったカール6世の生涯と功績。修史家による（von Historiographo）信頼できる諸史書からの要約。（発行地と発行年なし）³⁰⁾

よく知られた注目すべきあの雅号がここでは大文字なしで使われている。この小冊子の形式、構成、文体そして重点の置き方は、プリンツ・オイゲン伝をもとに考えて、とにかくシュナーベルが著者であることを否定していない。

プリンツ・オイゲン伝の序文の中でシュナーベルは、さらになお彼には当時の歴史記述の支配的な形式に対置されるべき要約した歴史記述の意図があることをより詳しく説明している。つまり、彼はこのオイゲン伝でもって「学識経験のある政治家たち、同様に高価な書物や雑誌（上記のような歴史的テーマに関する——G.シューベルト注）を購入することのできる裕福な人たちのために」書くことを意図しているのではなく、「大事なことを喜んで記憶の中で反芻したい人々、あるいはそうしたことを知りたいと思うが、しかしそのために多くの金を使うつもりはない人々」のために書かれるものである、「要するに、私は本書を、よく人が言うように、誰でも購入できるものにしたいのである」と述べている。ここで彼が宣伝しているのは、誰でも理解できるような一般向きの歴史記述である。それに合うようにシュナーベルは、それゆえに戦闘や包圍攻撃の銅版画を付けることもできない、「というのも、銅版画を入れると、本がすぐに庶民にとっては高価すぎるものになってしまうからである」と続けて述べている。そういうことで上述の「カール6世の生涯と業績」についての修史家による24頁しかない小冊子には、たとえば、約1000頁の長さの同じ内容の著作³¹⁾、つまり「庶民」の理解の度合いをいろいろな点で越えている当時の典型的な歴史書の一つが対峙している。シュナーベルの明白な目標は、このような教養ある専門家や図書館員向けの歴史記述に対して、「何百何千人もの男女の好奇心をできる限り満たしてあげる」ことであつた。特に彼はそうすることで生活費の支払いが楽になることをも期待したのであり、そこで彼はこのプリンツ・オイゲン伝の序文の中で、「まもなく同じテーマの何冊かの本が世に出るだろう」と予告しているのである。

ところで、『風変わりな軍人小説』の予告から生じたことについては、私は別稿において詳細な推測を述べた。³²⁾ 本稿において私が再び重要と考えたのは、シュナーベルが『シュトルベルク集報』という彼の新聞に関連してまったく同じように語った、自分は修史家的関心によって立つ作家であるという彼の作家としての自己理解を強調することであつた。1734年、彼は束ねられた新聞第1巻でのシュトルベルク伯への献辞の中で次のように書いている。

新聞の中での文章が上品さに欠けるところは、実に多数のさまざまな話がそれを補っている。そこでこの本は将来にわたってますますの歴史書と見なされうることだろう。³³⁾

上で挙げた諸作品がシュナーベルの作品であることがすべて正しいか否かは別として——このことについては内容に関する、また歴史的な、そしてテクス

ト批判的な今後の研究がおそらく決定を下すことができるであろう——、ともかくシュナーベルの当時の修史家的作家としての自己告知と自己理解はともに受け止められてよいであろう。そしてこの分野では、シュナーベルが書いた可能性のある、雅号あるいは匿名によるかなり小さな、しかしまた場合によってはかなり大きな著作物を系統的に探し出すことができるであろう。

しかし、私はシュナーベルの修史家的作家としての自己理解にはどうしてももう一つの理由ないしは意味があると考えている。そのことを最後に「メランコリーと歴史」と題して指摘することにしたい。

6. メランコリーと歴史

シュナーベル全作品に関する一種の包括的解釈をマルティーナ・ヴァーグナー＝エーゲルハーフが1997年刊行の大学教授資格請求論文『文学のメランコリー——叙説史とテキスト展開』において提示している。³⁴⁾「文学のメランコリー」という言葉には、まずは「幸福な人間は本を書かない」という常套句の響きがある。ところで彼女の論文において問題となっている「語りのメランコリー」のための実例がまさしくヨーハン・ゴットフリート・シュナーベルの作品なのである。「シュナーベルの小説では南大西洋のユートピア島や色狂いの貴族の性的冒険といったことより以上のことが問題になっていて、それが議論されてよいように思われた」³⁵⁾と彼女は明言し、そのあとシュナーベルの作品において「体系上の相対価値」を有するメランコリーを次のように我々に教示している。

特に好んでシュナーベルは語り手の特別な注目が向かう人物たちをメランコリックな性質で際立たせている。このことはメランコリーの精神史的伝統が有するトポスの言い回しを使うことによって生じるのであるが、その際アリストテレス的伝統とガレノス学派的伝統、つまり才能としてのメランコリーと病気としてのメランコリーが互いに釣り合いを保っている。同時に語りの過程において創造的な方法で効果を発揮する一つの差異が示されている。作中人物たちのメランコリーは、シュナーベルの小説においては、語りのきっかけ、たいていはメランコリーを孕んだ人生の語りのきっかけになる。換言すれば、メランコリーは、自らがやがて語ることによって癒そうとするメランコリーを物語が初めて創造するという意味で、物語そのものの機能契機となるのである。³⁶⁾

このような基本的な考え方のあとに続く詳細な研究の重点が『フェルゼンブルク島』に置かれているのであり、彼女の言葉によれば、「そのメランコリックな主人公がフェルゼンブルクの歴史のメランコリックな語り手かつ記録者となる。同様に広く読まれた『愛の迷路をふらつき回る男』は、偽態と欺瞞、性愛と形式的な戯れが美的満足のきっかけとなる色恋小説の枠内において反省する人物としてのメランコリーを導入している。メランコリーという言葉がすでに小説の題名に使っている『メランコリーに対する幸福と愛の勝利』は、メランコリーの文学的機能についての基本テーゼを保証している。」³⁷⁾ 私はここでヴァーグナー＝エーゲルハーフのこれらの研究を一つ一つ取り上げて解説するつもりはない。ただフェルゼンブルク島のメランコリックな年代記作者エーバーハルト・ユーリウスについて彼女が的確な性格づけを行っていること、そして同様に『フェルゼンブルク島』にも実例として存在するメランコリーとユートピアとの関連について彼女が述べているということを指摘しておきたい。彼女の分析によると、「メランコリーはフェルゼンブルク島民全員の≫遺伝病≪(Urkrankheit)、ユートピア島モデルに潜在する精神状態として解釈可能である。」³⁸⁾ ユートピアとメランコリーの関係ならびにメランコリーの逆説的構造に基づいて、彼女は結局のところフェルゼンブルク島ユートピアの挫折すらも語りの単なる進行ということから次のように説明することができるのである。「メランコリーはその秩序離脱の態度においては無秩序そのものであるが、しかし常に秩序に比肩しうるものである。秩序ある状態はそれなりにメランコリックな無秩序を生み出すので、その結果メランコリーは永続的な自己止揚の状態を表わすことになる。」³⁹⁾ —— ところで、「メランコリー」というものが何であるにせよ、またヴァーグナー＝エーゲルハーフの解釈の一つ一つがどのように評価されるにせよ、シュナーベル作品における明白な一貫した基本的ライトモチーフならびに主題としてのメランコリーの彼女の指摘はまったく適切である！しかしここで驚くべきことは、彼女がこのことに関連してシュナーベルの修史家的作家としての自己理解に気づいていないということである。シュナーベルのこの自己理解は彼女の所見に適合するだけでなく、メランコリーという彼女の所見を —— 別の視点から —— 証明するものなのであるけれども。もちろんこの関連でフェルゼンブルク島のメランコリックな年代記作者エーバーハルト・ユーリウスについての彼女の指摘は、興味深くて注目に値する。というのも、この年代記作者はギュンター・ダマンの的確な判断によれば、まさにシュナーベル自身の分身と見なされるべきであり、フェルゼンブルク島でアウトサイダーとして観察する彼の状況は、シュトルベルクにおけるシュナーベル

のそれと相関しているからである。⁴⁰⁾

『意味なきものの意味づけとしての歴史』、これはテオドーア・レッシングの有名な歴史哲学書の題名であるが、この題名だけでもすでにメランコリーと修史家との関係を明確に語っている。レッシングはこの論文を第一次世界大戦中に、観念論ならびに唯物論に関する極端なまでの目的論的な歴史理解——今や「歴史学」へと突然変異した当時の修史を支配し、そこでは歴史が進歩信仰の呪縛の中で一つの宗教の代替物となっていた——に対抗して執筆したのである。この著書の第12章「歴史における運命」、第72節「現実からの救済としての歴史」には特に『不思議な運命』における身の上話のための注解とも読める次のような一文が見出される。

生の恐るべき、意味のない、狂気の実情がのちになって歴史へと歪曲され、やがてついには歴史的伝承として、(大河というものが人間のあらゆる不浄な汚物を進んで受け入れるが、最終的にはそれらを明るい澄み切った波に変えてしまうのに似て) まるですべての苦痛、すべての困窮、そして魂のあらゆる苦悩が払い落とされたかのように、無邪気かつ単純に読まれる有様を見ると、また苦しく厳しい体験であったことの一切があとからはやがて波乱に富んだおもしろい小説のように読まれる有様を見ると、人間は歴史でもって自らの人生の出来事の再現をめざしているのではなく、まさにその反対、つまり自分の運命のすべての苦しみを伴う出来事からの完全な治癒と救済をめざしているのだという考えにおそらく人は到達することができるであろう。⁴¹⁾

レッシングがそこに見ているのは、「救済の行為であるとはいえ、自己欺瞞の行為」である。偽りの現在において(再)構築されることによって、歴史はひたすら偽造物となるだけである。たとえば、フェルゼンブルク島においてのように、より高い段階において、つまり偽りの現実の外部において初めて、修正されていない自己批判としての歴史ともいえるべきものが存在しうるであろう。

テオドーア・レッシングがその歴史学批判を発表したのと同じ時代に、ヴァルター・ベンヤミンは『ドイツ悲劇の根源』を書いている。彼は1925年にこの著作でもってフランクフルト大学に大学教授資格請求を行ったが、よく知られているようにそれは失敗に終わった。さらに彼はこの著作によってシェイクスピアの影に完全に隠れてしまっているドイツ・バロックの悲劇作品について表面的に言及しようと思ったのであるが、しかし実際にはそれによって近代の言説にとって注目すべき、認識批判的な寄与を行ったのである。私はここで哲学的な、あるいは文芸学的なベンヤミン解釈に立ち入るつもりはないが、⁴²⁾ ただ

彼の研究対象、つまり17世紀後半のドイツ・バロック悲劇に具体的に関わりのある二つの指摘を取り上げることにはしたい。

バロック時代の偉大なドイツ劇作家たちはルター派信徒であった。反宗教改革による復古の数十年間にカトリック信仰がその規律の全力をあげて世俗生活に浸透していったが、ルター派信仰は以前から日常生活には背を向けていた。ルター派信仰が教える市民的な暮らし方の厳格な倫理には、いわゆる「良き業」の放棄ということが対置されていた。ルター派信仰は特別な宗教的奇蹟を「良き業」とは認めず、人に信仰の恩寵を教え、世俗的・国家的領域を市民的徳目の証明に定められた、宗教的にはただ間接的な生き方の試みの場とすることによって、確かに民衆の中には厳しい義務感を植えつけたが、しかし大市民には憂鬱感を植えつけることになったのである。⁴³⁾

この憂鬱感、つまり議論されている悲哀劇の悲哀からベンヤミンはメランコリーという近代にびたりと当てはまる概念を展開させるが、この概念はこのような含意では歴史的にルターの「隠れた神」に基づくものであり、すでにバロックがこれを取り上げようと試みている。バロック様式のあの充溢はこの点から言って、神が身を隠しているか、あるいはまったく不在である世界の空虚に対する反動であると理解される。この世は「良き業になんら救済の意義をも認めない」ルター派神学によって空疎化された。「それによって人間の行動から一切の価値が奪われてしまったので、この世は空虚である。[中略]ベンヤミンはルターの「隠れた神」によって刻印された状態を超越なき世界の概念に含み込ませているのである。」⁴⁴⁾

私がここで取り上げたい二つ目のベンヤミンによる指摘は、悲劇の対象とは異なる、議論されている悲哀劇の対象についての次のような指摘である。「オーピッツは、挙げたような諸事件が悲哀劇における芸術的核心としての素材にはならないとは言いはしない。彼の時代にはそれは自明のことだからである。あの時代が姿を見せたような歴史的な生活が悲哀劇の内容、つまりその真の対象である。その点で悲哀劇は悲劇とは異なる。というのも、悲劇の対象は歴史ではなく、神話だからである[後略]。』⁴⁵⁾ 強調しておきたいが、ここで問題となっているのは「歴史」(Die Geschichte)、いかなるものであれ、そのようなものとしての歴史ではなく、ドイツのバロック悲哀劇が成立した歴史と、そこに自己解釈として表われている歴史理解である。「バロック本の作者はく悲哀劇としての歴史の表現」⁴⁶⁾ である悲哀劇の歴史性を映し出しているのである。⁴⁷⁾

この再構築された抽象的記述を背景として、今やルター派信徒シュナーベル

の修史家的作家としての自己理解が具体的に明らかにされるのである。

神が不在で、その歴史は悲哀劇であるという空虚化した世界においては、＜大市民＞の「生活と行為」も＜小市民＞のそれぞれの生活も等しく問題化するが、同時に両者は等しくそれぞれ独自の価値をも受け取るのである。個々人の人生は自ずからより高次の意味連関に編み込まれたものとしては理解されず、それぞれに独自の運命として、つまり、人が自らその釈明をし、それぞれに特別なものとして広く人々の関心の目に入ってくる個別的な人生運命として理解される。いかにすれば正しく生きられるかという未解決の問題に関してばかりではなく、神慮は人のためにどのような偶然事を用意することができるかということに関してもまた然りである。このことは偶然にではなく、当時の追悼説教における伝記的部分の増加というかたちをとって表われるのであり、その伝記的部分は故人自身によって前もって書き残されるということもひんぱんにあったのである。そのことが同じようにシュナーベルの作家的意図にも表われているのであり、彼は我々に本当の身の上話を提供しようと考え、それゆえに自分の作家としての仕事をもっぱら修史家の仕事として理解することができるのである。この修史家としての仕事は、しかし、上に略述したような背景をもってすでにシュナーベルの時代には、たとえこれがあるいは未だ明確な計画に従ってのことではないとしても、もはや意味なきものを意味づけるということ以外の何ものでもありえない。シュナーベルはこの意味づくりの仕事をまずはあっさり、小説の一つ一つの人生運命を組み入れている枠を通して成し遂げる。つまり、彼は何人かの航海者たちの運命をフェルゼンブルク島において語らせることによって、これらの運命は——いわば救済されて——地上の樂園において終結するのである。フェルゼンブルク島がこの地上の樂園であり続ける限り、この意味構成は機能する。それがもはや機能しなくなるのは、フェルゼンブルク島がどこであれ神不在の他の場所のような世俗の場所になり、悲哀劇である歴史がフェルゼンブルク島に侵入するときである。「(前略) ただ永遠に残念なことは、それ(フェルゼンブルク島——G.シュューベルト注) が鎖で天にぶらさがっているわけではないということです。(後略)」と『不思議な運命』第四部(240頁)においても語られている。それからまた第三部と第四部においては「本当の身の上話」はもはやほとんどなく、最後の第四部にはただ空想的なミルツァマンダ王女の物語があるだけである。

以上述べてきたことに続けて、私はありうるかも知れない二つの誤解を防いでおかななくてはならない。

まず第一に、もちろん私は第一部と第二部における身の上話も「フェルゼンブルク島史」と同じくフィクションであると思っている。それにもかかわらずこの虚構の枠はシュナーベルにあってはいわば「それはまったく本当の話を含んでいる」ということの根本をなすものであり、また根本となるべきものである。このことはすでに、上述の身の上話が虚構の枠の筋を背景にして純粹かつ一見確実なものとして際立つという技巧を通してなされている。

第二に、上で述べられてきたことは、あたかもそれでもってシュナーベルの作品において重要なのは唯一の、あるいはただ本質的な意味構成であるかのよう、誤解されてはならない。その反対である、と言ってもほとんどよいくらいである。というのも、シュナーベルの作品についてより新しい解釈が感嘆されつつ受け入れられるとき、ビッターフェルト近くのザンダースドルフ出身で、シュトルベルク・アム・ハルツで物書きをしている理髪師にあっては、その当時の「人間の条件」に関するほとんど全言説と言ってもよいほどのものが議論の種になるからである。——そしてそれはたいてい注目すべき水準においてである！ギュンター・ダマンはシュナーベルのさらに別の複雑な『意味にかかわる仕事』——これは『フェルゼンブルク島』の完全な新版（1997年）のためにつけた第三部の長いあとがきの当を得た題名である——について、それにふさわしく極めて有益な情報を提供している。さらにダマンは『フェルゼンブルク島』に関しては第一部と第二部における身の上話よりも、むしろ枠の筋の方に取り組んだ包括的な補論を行っているのであるが、しかし次のような思いがけない、否、思いがけないものでもない結びの文に辿り着くのである。「身の上話の構造の企画史はそれ（『フェルゼンブルク島』——G.シュナーベル注）に重要な地位を与えなければならないであろう。」⁴⁸⁾ この一文は上に集められている引用文にさらに別の一変形文として追加されるべきである。

私にとって本稿では結局のところシュナーベルの修史家としての主張の意味をめぐる試論だけが重要であった。そして私が本稿でもって端的に指摘したかったことは、シュナーベルの『フェルゼンブルク島』第一部と第二部には、およそ、ただ単にメランコリーの精神からだけではなく、特にプロテスタント的追悼説教およびこれと結びついている修史の精神からの近代小説の起源があるということである。

原注

- 1) この点に関しては Joachim Knappe の基本的な著述 *Historie' in Mittelalter und früher Neuzeit*. Begriffs- und gattungsgeschichtliche Untersuchungen im interdisziplinären Kontext. Baden-Baden 1984. を参照のこと。
- 2) Gerd Schubert: Von „evangelischer Gewissens-Freyheit“ und von des Hof-Diaconus „ordentlichen Zuhörern“ – Bemerkungen zu Johann Gottfried Schnabels *Umständlicher Nachricht* vom Durchzug Salzburger Emigranten durch Stolberg im Jahre 1732, in: Gerd Schubert(Hg.), *Jahrbuch der Johann-Gottfried-Schnabel-Gesellschaft* 2000-2001. St.Ingbert 2001 (Schnabeliana 6), S.49-57. ならびにこれに続くこのシュナーベルの時事雑報の再掲 *Umständliche Nachricht, Welchergestallt ein, in 600 Seelen bestehender Troup Saltzburgischer Emigranten in der Hoch-Grüfl. Residentz-Stadt Stolberg am Hartz den 2^{ten} 3^{ten} u. 4^{ten} Aug. 1732. eingeholt, empfangen, geistlicher und leiblicher Weise verpflegt, nachhero auf die vorhabende fernere Reise geleitet worden.* [1732] (同上年報 59-92頁) を参照のこと。
- 3) このことに関しては Wolfgang Knappe: „Mein Ammt ist, aller Welt zu sagen, was sich in Stolberg zugetragen“ – Johann Gottfried Schnabel als Hochzeitschronist. (G.シュナーベルト編: 同上年報1996年、St.イングベルト1996年、Schnabeliana 2号55-66頁)、ならびにこれに続いて再掲載のシュナーベルの時事雑報 *Das höchst-erfreute Stolberg* [1737]. (同上年報67-112頁、ここでは108-9頁) を参照のこと。
- 4) Arno Schmidt: Der Zufluchtsort des bedrängten Untertans, in: *Die Zeit* 6 (1960), S.7.
- 5) Karl Rosenkranz: Insel Felsenburg, in: Carl Rosenkranz, *Zur Geschichte der Deutschen Literatur*. Königsberg 1836, S.78-88. ここでは G.シュナーベルト編: 前掲年報 2000-2001年、St.イングベルト2001年、Schnabeliana 6号 125-130頁に再録のテキストから引用。ここでの引用は130頁。
- 6) Adolf Stern: Der Dichter der ‚Insel Felsenburg‘, in: Adolf Stern, *Beiträge zur Litteraturgeschichte des siebzehnten und achtzehnten Jahrhunderts*. Leipzig 1893, S. 76f.
- 7) Hermann Ullrich: Einleitung, in: Johann Gottfried Schnabel, *Die Insel Felsenburg*. Erster Theil(1731), hg. von Hermann Ullrich. Berlin 1902. (Deutsche Literaturdenkmale des 18. und 19. Jahrhunderts 108-120, N.F.58-70), S.32f.
- 8) Hans Mayer: Johann Gottfried Schnabels Romane, in: Hans Mayer, *Studien zur deutschen Literaturgeschichte*. Berlin (Ost) 1953. (Neue Beiträge zur Literaturwissenschaft 2), S.28.
- 9) *Katalog der Leichenpredigtensammlung der Stadtkirche Sankt Martini in Stolberg/Harz*, eingel.u.bearb.v. Monika Lücke, hg. v. Landesheimatbund Sachsen-Anhalt e.V. Halle 1996 (Beiträge zur Regional- und Landeskultur Sachsen-Anhalts 3).
- 10) 同上書 151頁。
- 11) これに関しては Nikolaus Stingl(Hg.): *Der wahre Robinson oder Das Walten der Vorsehung*. Leben und Abeuteuer des Alexander Selkirk. Nördlingen 1980. を参照のこと。
- 12) これに関しては Reinhard Jannen: „Hark Olufs besondere Avantüren oder wonerbares Schicksahl“. Wiederentdeckte Fassungen der Lebensbeschreibung von Hark

- Olufs, in: *Nordfriesisches Jahrbuch* 1999. Bd.35. Bredstedt 1999, S.11-40.を参照のこと。
- 13) Ede Solymos: *Ki volt Jelky András?* Baja 1983 (A Bajai Türr István Múzeum Kiadványai 25), mit deutschsprachiger Zusammenfassung: „Wer war Andreas Jelky?“, ebd.,S.61-62.を参照のこと。
- 14) Roland Haas: *Lesend wird sich der Bürger seiner Welt bewußt.* Der Schriftsteller Johann Gottfried Schnabel und die Entwicklung des Bürgertums in der ersten Hälfte des 18. Jahrhunderts. Frankfurt a.M., Bern, Las Vegas 1977 (Europäische Hochschulschriften I/227), S.205.
- 15) Dirk van Laak: Cuius religio, eius regio. Die Insel Felsenburg—eine Quelle kleinbürgerlicher Mentalität? (G.シュナーベル編: 前掲年報1997-1999年、St.イングベルト1999年、Schnabeliana 5号、39-56頁)
- 16) 稲元萌: 『フェルゼンブルク島物語』付録「ドン・シリョ・デ・バラロの生涯」について(上) 福岡大学人文論叢第23巻第1号1991年 19-41頁参照。
- 17) 稲元萌: フェルゼンブルク島——その歴史と現況(1725)の記述が考えさせること九州ドイツ文学第5号1991年 76-91頁。G.シュナーベル編: 前掲年報1997-1999年、St.イングベルト1999年 Schnabeliana 5号、104-119頁。ドイツ語レジュメ 101-103頁参照。
- 18) 稲元萌: <この世の楽園>の改良? —— フェルゼンブルク島1726-1728「ロゴスとポエジー」伊藤利男先生退官記念ドイツ文学・語学論集 福岡1995年 49-64頁参照。
- 19) 稲元萌: 共和国の夢——フェルゼンブルク島1730 福岡総合研究所報第186号(人文科学篇) 1996年 29-40頁参照。
- 20) 稲元萌: フェルゼンブルク島1734-1740——地上の楽園にも天災地変と戦争は迫る——福岡大学人文論叢第31巻第1号1999年 299-318頁参照。
- 21) Hermann Ullrich: *Robinson und Robinsonaden.* Bibliographie. Weimar 1898, S. 146.
- 22) ウルリヒ、上記注7の文献51頁。
- 23) Gerd Schubert: Der Wein auf Tristan da Cunha. Eine Übersicht zu Arno Schmidts Bezugnahme auf Johann Gottfried Schnabels „Insel Felsenburg“ mit einigen Anmerkungen, auch Adam Oehlenschläger betreffend, in: Thomas Krömmelbein u. Martin Lowsky(Hg.), *Arno Schmidts Haus-götter.* Erste Folge. Von Johann Gottfried Schnabel bis James Joyce. Frankfurt a.M.1991. (Zettelkasten 9), S.9-71. ここでは36-37頁を参照のこと。
- 24) 同上書 36-39頁参照。
- 25) *Gesamtverzeichnis des deutschsprachigen Schrifttums(GV)* 1700-1910. Bearb. unter der Leitung v. Hilmar Schmuck u. Willy Gorzny. Bd.13. München, New York, London, Paris 1980, S.139.
- 26) Dietrich Grohnert: *Untersuchungen zu Inhalt und Struktur von Johann Gottfried Schnabels Roman „Die Insel Felsenburg“.* Dissertation (B), masch. Potsdam 1975. Literaturverzeichnis S.6f.
- 27) Selmar Kleemann: Der Verfasser der Insel Felsenburg als Zeitung-schreiber, in: *Vierteljahrschrift für Litteraturgeschichte* 6(1893), S.337-371. ここでは346頁注16。
- 28) クレーマン(上記注27) 347頁注16に従って引用。
- 29) シュナーベル(下記注32)を参照のこと。
- 30) この文献はヴァイマルのアンナ・アマーリア(Anna Amalia)公爵夫人図書館に所蔵

されている。分類番号は 4°IX,172(n43)。

- 31) 『これまで最高に気高く、極めて貴き、最強等々のローマ皇帝にしてカトリック国王カール6世の生涯と功績。極めて信頼できる報告、文献および記録から集めたもので、一人のドイツ愛国者による、古きハプスブルク家とそこから生まれ出たオーストリア皇帝に関する暫定的な短い報告付き。フランクフルトおよびライプツィヒ、ラインハルト・オイスタヒウス・メラール刊。1741年』 8頁+983頁。バイエルン州立図書館所蔵。分類番号 Germ.g.258。
- 32) Gerd Schubert: Wunderliche Sammlung einiger Werke des Johann Gottfried Schnabel. Eine Übersicht der Werkzuschreibungen zum 300. Geburtstag des Verfassers der Insel Felsenburg mit neuen Entdeckungen, in: *Daphnis. Zeitschrift für Mittlere Deutsche Literatur* 22/2-3(1993), S.413-442. ここでは426頁以下。
- 33) クレーマン (上記注27) 357頁より引用。
- 34) Martina Wagner-Egelhaaf: *Die Melancholie der Literatur – Diskurs-geschichte und Textfiguration*. Stuttgart/Weimar 1997, S.253-325: „Johann Gottfried Schnabel. Die Melancholie des Erzählers.“
- 35) 同上書 255頁。
- 36) 同上書 256-257頁。
- 37) 同上書 257頁。
- 38) 同上書 270頁。
- 39) 同上書 278頁。
- 40) Günter Dammann: Stolberg im Meer, in: *Die Zeit* 47(1992), S.77. を参照のこと。
- 41) Theodor Lessing: *Geschichte als Sinngebung des Sinnlosen*. München 1919, S. 156.
- 42) これに関しては Michael Theunissen: *Vorentwürfe von Moderne*. Antike Melancholie und die Acedia des Mittelalters. Berlin, New York 1996. (本書48-53頁にはベンヤミンのメランコリー概念「ベンヤミンの悲哀」についての記述あり) およびヴァーグナー＝エーゲルハーフ (上記注34) 175-195頁 (Der melancholische Blick. Zu Walter Benjamins *Ursprung des deutschen Trauerspiels*, 1928.) を参照のこと。
- 43) Walter Benjamin: *Ursprung des deutschen Trauerspiels*, in: Walter Benjamin, *Gesammelte Schriften*, Bd.I/1. Frankfurt a.M.1974, S.317.
- 44) トイニッセン (上記注42) 50-51頁。
- 45) ベンヤミン (上記注43) 242-243頁。
- 46) 同上書321頁。
- 47) トイニッセン (上記注42) 49頁。
- 48) Günter Dammann: Über J.G.Schnabel, in: Johann Gottfried Schnabel, *Insel Felsenburg*. Bd.3: Anhang. Frankfurt a.M. 1997 (Haidnische Alterthümer. Literatur des 18. u. 19. Jahrhunderts hg. v. Hans-Michael Bock), S.240.

訳者あとがき

本訳稿は Gerd Schubert: Der melancholische Chronist – Johann Gottfried Schnabel als historiographischer Schriftsteller – Annäherungen an einen Autor des frühen 18. Jahrhunderts. の全訳である。

原著者ゲルト・シューベルト氏は1960年ブレーマーハーフェン生まれで、ベルリン自由

大学で哲学、心理学、社会学およびスカンディナヴィア学を学んだあと、マックス・プランク研究所図書館ならびにアルベルト・アインシュタイン研究所研究員などを経て、現在はベルリンのレーマンズ書店勤務のかたわら、ヨーハン・ゴットフリート・シュナーベル協会会長の職にある。1995年発刊の協会年報「シュナーベリアーナ」の編集・出版にも携わっておられ、若いながらも今日のシュナーベル研究の中心的存在である。

このたび私たち二人にシューベルト氏の論文を翻訳する機会が与えられたことについて、シューベルト氏ならびに翻訳仲介の労をお取りくださった稲元萌先生に厚く御礼を申し上げます。また稲元先生には翻訳の段階でいろいろと御教示賜り、訳稿にも一通り目を通していただき、重ねて心より御礼を申し上げます。